

傾城買二筋道

分五寸三	コ	ヨ	紙	表
分九寸四	テ	タ		
分九寸二	コ	ヨ	粹	文
分一寸四	テ	タ	本	

序

孝行に賣れ

不孝に受出さ

れとは。實に

川柳点の妙

なるかな。虚

と實の中街

通と不通を洗

顔て。意氣路

を磨く心の駒

下駄。いやな

風には蹴出シ

棧の外ハ文

字。ふるも有

斬首圖

序

孝行に賣れ。不孝に受出さる。ハ

實に川柳点の妙なるかな。虚

と實の中街通と不通を洗

顔て。意氣路を磨く心の駒

下駄。いやな風には蹴出シ

棧の外ハ文字。ふるも有。又

り。又照とは
 ちやのきは
 茶屋が軒端の
 てうらん。そのらう
 燈灯か。其蠟
 燭の流れの
 身。辛氣辛苦
 の苦界十年。
 たとへ一文が
 おはぐら。か
 鐵器を買ふと
 も。豈千金を
 尊しとせん。
 てれん手管の
 ながふみ
 長文を見世雅
 裯の音色に連
 て。通ひ廊の
 うらむや
 裏茶樓まで。

茶屋が軒端の燈々の其蠟燭の
 流るの身。辛氣辛苦乃苦界十年。
 たとへ一文が鐵器を買ふも。豈
 千金を尊しとせん。てれん手管
 の長文を見世雅裯の音色に連
 て。通ひ廊の裏茶樓まで。

娼婆やうてもおよば
 ぬ穴あなを探し
 て。酔あぢを味は
 ふ梅暮里むめほり谷我こが
 子こ。嗚呼あゐ其才
 の高きこと。
 水道尻すいどうじりの火
 るやぐらそつか
 見櫓みりうも足下あしごに
 低く。筆頭ひつどうの
 走れる事。南
 一の晉しん駕かも
 遅しとせん。
 不佞ふねい此書このしよの件
 頭とう新造しんぞうとな
 り。惣菜そうさいの芋

娼婆やうてとゆふぬ穴あなと探さがす。酔あぢと
 味あぢふ梅暮里むめほり谷我こが子こ嗚呼あゐ其才
 の高きこと。水道尻すいどうじり乃火見櫓
 も足下あしごに低く。筆頭ひつどうの走はしる復
 南一の晉しん駕かも遅しとせん。不佞ふねい此書このしよの
 伴頭ばんとう新造しんぞうとなり。惣菜そうさいは芋

を喰て。屁の
如き序文を作

し。謹〇でもつ

て。一寸マア

お見なんしと

しかいふ

于時寛政戊

午春視初衣

裳日

於暱囉哩

樓上

京ばしの

息子

喰て。屁の如き序文と作し。謹

てもつて。一寸マアお見なんしと

しかいふ

于時寛政戊午春視初衣裳日

於暱囉哩樓上京けり息子



傾城買二筋道

序

智者ちしやにも。一失しつ

あれば。愚者ぐしやの

一德ひとくあり。加賀か

絹ぎぬの弱よわき。薩摩さつ

布ふの強つよき。また

は御婢おんなしりの棚尻たなしり

も。脊負せおふに。利

あれば。捨すてがた

傾城買二筋道序

智者ちしや尔毛。一失しつは禮れいは愚者ぐしや乃

一德ひとくある。加賀か絹ぎぬの弱よわきも薩摩さつ

布ふの強つよきも。御婢おんなしりの棚尻たなしり毛。

脊負せおふに。利あれば。捨すてがた

く通子の云。遊いろ

冶郎の乖功は。

醜夫の溫柔に

も。猶およ及よざるが

ごとしとは。宜むべ

なり。人は只心

のやさしきこ

そ。尊たつけれと。不

俟かくこかつてを書事

通子の云。遊いろ治郎乃乖功は。

醜あし夫との溫柔うらやに

も。猶およ及よざるが

ごとしとは。宜むべ

なり。人は只心
のやさしきこ
そ。尊たつけれと。不
俟かくこかつてを書事

しかり

午のはつ春

梅暮里谷峨述

志二里

午乃る山

梅暮里谷峨述







目錄

○夏の床
○冬の床

こゝの歌ふ

往より返り

谷家

盡る事

傾城買二筋道

谷 峨作

○夏の床

世界は小見勢。客は廿五六のそつべいのなきいろ男にて。惚どころなきほど己惚の未至通。尤地廻り同前。逢方は二十一。たいていはうつくしく。はなはだうわ氣まんさらでもなき四五會め。

水調子で、今夜半の短かはよけれども。おもふとのこと添寐のふしに口ではいへどしんじつの。中を隔るあつきの垣ね。又にくらしいあの蚊の声。とこよりをとつて。かやのかを焼つ。やかれつ。うわき同士。とりどころなきなつの床。引仕懸。須磨衣いつそぬしの声はいきだよ。五郎 声斗はめづときみやい

もほめてくりやア。廣小路の十哲のうちでは。顔淵といふものだぜ。須磨 何のこつたへ。五郎 い、やよ。ふでかしらだといふ事よ。須磨 ヤ、むづかしいものだね。百さんとやらもういゝ声だね。あれもなんぞといふのかへ。五郎 なアに。しかし。そふ声できゝ知られては。百もいろ男だぞ。須磨 そりやアぬしたちのよふに入こんでおいでなんすものを。だれでも知らぬものはおつせんのだ。おふかたぬしもそいら中がいろとだらけも。あいそうの盡きたもんだぞ。じらさづとも眞においでなんすところを。今日はあかしておきかせなんし。五郎 そんなにてまへに氣をもませる事はねへから。話してへが。ほんに

此頃はちつといろとがしげ／＼だ。そのかわりに内へかいると。お袋の小どがある。かつぶし一本でもらう氣はねへか。すまヤ猫じやアあるめへし。勿體ねへ。ばちがあたらしいすにへ。そしてほんのかゝさんかへ。五郎 ほんのですねへと。今頃はおさらば遊んふせいなりだ。須磨 よふむだをいゝなんす。口のはたをつねりいすにへ。あれきさな。また人の顔をみてわる口をいおふともつて。五郎 わる口はいわねへが。まあ手前はいくつだ。須磨 あてゝみなんし。五郎 まづ手前いくつの時うられて判はたがした。すま でへふむづかしいね。ハイ十三で賣れて親判さ。五郎 十三で賣れて親判なればかふと。指をおり十三。十四。十五。十六。此四年ははなせねへから。跡せうみ十年六兩づめぐらいな女だが。子がいだけねんいつばい十五兩か。須磨 歳をあてなんすとお

もやア。
[五郎] おつと氣のみじかへもんだ。こゝから割出さねへけりやア。きつい所はあてられねへ。まあそつちを向いてみせや。
[須磨] わつちやアいや。

[五郎] 瘦地にして髪うすく。
枕だここのい
つた處まで。よくふんで廿三で御不足なら。おてまへにおくきなさる方がおとくよふだ。
[すま] むごひ事はつかりい
ななんす。ほんとうわね。深川にい
した。
[五郎] なに深川にいた。どふりで。

[すま] 人がわるいといふなんすのかへ。
[五郎] イヤいまだといふ事よ。
[須磨] あこのう
そばつかり。ほんにいやとおもふ客人は。腹のたつほど心がしれる。またな
んとかおもふ客人は。かんがへて。じれ
つてへものだ。
とかんざしにて
とあたまをかく
[五郎] コ
もちと手をあげてみや。何かあるせ。
[すま] わつちやアいや。
[五郎] いやじやア
不承知だ。
とむに手を
とあたためる
[すま] まあまちな
んし。すいぶんみせへすが。人の名を

きく時はわが名をのるとかいゝすか
ら。まあぬしの手から見せんし。
[五郎] それを覺へるに本屋をいくら倒した。
[須磨] しりいせん。
[五郎] さあみや。

おらが手にやア。そんなやばはなしだ。そこへいつちやア。高麗やでむかふにばかりさせた。さあ。これから手前の手をじんじようにみせや。
[須磨] 見せるのさ。サアみなんし。とましん手を
見るは。まんざらでなきゆへ。
[五郎] まあ。こり
かくたんといふところなり。

やアなんだ。貧乏寺の過去帳ははだしだ。是を見ては。
[すま] 三年の戀もさめるかへ。
[五郎] はらがたつ。
[須磨] なせ。
[五郎] はて。こら程あるうちには。まだ心の残つてゐるのがあるふと思へば。
[すま] こふ見せもふすぐらひじやア。たとへどふいふ事があるふとも。ぬしの心いき次第で。どふともしいすのさ。
疑りなんすなら。何でもしいせう。又客人をつきだせなら。ぬしの不承知な

客人はつき出しせいせう。
[五郎] ばかな。ともねへ客人をつき出す事もなし。また指切髪切てわかつたとおもふは。むかしの事よ。
[須磨] そして。どふすれば心がすみいすへ。
[五郎] そんなら一番はやい事をいおふ。
[すま] なんだへ。
[五郎] 金をかしてくりや。ヲイびつくりしめへ。
[すま] そして外へ持つてくのかへ。

[五郎] いや。外へは持つてかねへが。まあ手前どふいふめちかへで呼かしらねへが。おれだつて金がありあまつて遊びにきやアしねへ。とんだ内は火の車だけれど。手前が水車のよふな口車にまよつて。あき車が坂をおりるよふに。了簡もなく来る氣だか。爰だよ。それ。おればかりおもしろいめをして。お袋を日干にもされねへわな。尤手前が勤ぐらいは。たて引をする覺悟でもあろふが。それじやアまあ當分こられねへといふものだ。また手前もじつに

呼吸があらば。そのしのきを二三本かしてくりや。そふすりやおれもあふきに内も出よいといふものだ。また手前の心いきもすつばりわかりやす。これなせだまつている。不承知か。何もその様に。茶碗をわつておつけてみよふといふ顔をしている事はねへわな。またおれにかぎらず。手前のよほうとおもふ客。はちつとは地切をきらねへくりやアならねへ。それともあたまのものは借物なら。あすの晩までに壹兩貳分ばかりかしておいてくりや。これだまつているはできねへか。すまそんなら。ぬしは欲得づくだね。五郎できざあいが。手前もたゞよほうとは餘程むしのいゝものだ。少しぐらいはどふか算段のありそふな物だ。

まだなじみもうすきに。あまりのいろ男に。逢方あじな氣になり。たがひにしはし話もたへ。たばこに程な

く夜もしらみ。歸りし跡にて。傍輩の評もよからず。引かたと心づき。そこ爰のあらが見へ。あふかたこれはまき直しと見へたり。またつくる夜のむしあつさに。

五郎コラなんだ。そわ／＼何をしていた。また八重がりのやりくりか。すまきついきいた風だね。五郎焼つぎの火かげんのちがつたよふに。そふ。ひんとする事はねへ。マアねやな。今夜はすつばりおれが心いきをはなして。安堵させてやろふ。すまあんどさせるへ。あんどたア燈をとす物かへ。五郎コラおつにはぐらかすが。おれがいつた事ができねへによつて。いゝわけなしの我慢だな。ハテ出来ざあきいた風をせずと。生得はたらきのねへむまれつきで。三文のくめんもむづかしうござりやすと。しらでいふほうがいゝ。大道で薬を賣よふにのみこみすがたをいつて

も。せうが入れ智恵といふものだから。人形芝居の太刀打を見るよふに。小サな袖から大きな手がでたり。なにかするから。ねつから不都合だ。なんば水犬のとやといふ前髪をきつても。めんびろふどのふるきんちやくを見るよふに。地がすいてへんだせ。それで耳のはたまで口がきけると。智恵のねへ所をとりへに。ふきや町川岸へやるという。銭もうけだ。須磨わつちもいゝ。銭もふけをおしへておくんなしたから。氣が丈ふになりいした。まだ智恵のできるには。ぬしを黒焼にしてそれをのんだらよかろふがね。どふぞ智恵をほしうござんす。そふするとかわいゝ男にやアいきなりでもさせてよんでやりいす。五郎何。いろおとこ。手前のいろ男はどんなだろふな。たしかにりうぐうの使はんといふもんだろふ。其心はもちがすきだ。尻こだまをぬか

れねへよふにしや。すまぬしは見かけによらねへ。いつそ苦勞せうだね。いゝかげんにしなんし。年がよりいすにへ。花園すまきぬさん。ほち／＼でいながら。いゝかげんになんしよ。座禪はじめは少しそうだつたがね。もふもふ大ちやき／＼さ。五郎なんだ。此すりこぎめら。うぬらにほち／＼のちやき／＼のと。鼠が米櫃をかちりはしめいし。なんば玉屋のせりふを小耳にひつはさんでも。うぬらにかきまわされてなるものか。いゝかとおもつてほち／＼のちやき／＼のと。とふもろこしか。冬ならさつま芋を賣といふ。こんな貧乏屋台にやアにやわねへ。よしやなまあ。全体てんばうをあつかふよふに。こしからめくされ錢じやアまにあわぬ。五郎殿なぞと取組ふとおもわば。千手観音へ塩だちをして。ひとりや三

年ももみ。三谷の毘沙門から百足を後見にたのんでも。まだおかつたるい。須磨それだから。とり組ねへからいゝじやアねへかへ。五郎きつて。よふ口かうじやをいふあまた。すままだ出世の身だよ。あまのお慮外だね。五郎なに出世もきがつよひ。火口売のてんびんにおからのつへで。地ごくえとうしみをうりにいかふといふつらでもか。あふかた手前の寺證文にやア。あやまつて手はきりんしたゆへ。手はござなくひとかいたろふ。すまぬしはまた代／＼一向な仕打の者にまぎれござなくはかへ。五郎なんだ。此女はわるくしやれるぜ。よしやたとへ。惣菜のあらめに百が梅漬を食つて。五町まち中へ黒飛の糞をたれても。はりあふ事があるものかへ。盲蛇とはわが事だ。五郎さまなぞのまへでは。ちつとはしよげそうなるものを。おさき眞闇でしやれる

が。おれを知らねへけりやア。耻のよふにおもふ世の中だ。手前らがよふなやぼとばけものは。箱根の御關所でとふさぬはづだがさ。すまアアこわいのふ。花園さん。おき／＼なんしへ。やばから化ものが出いすとき。いつそ氣味がわるうござんすよ。五郎こんにやくの幽靈が。ところてんのお傳馬にのりはしめいし。そふぶる／＼する事はねへ。ばけものがこわいのか。そりやア氣づかいしやんな。手前のかほが化ものといひかうといふ物だから。むかふでゆびをくわいて逃るわな。ほんの人間のふりをして。あだにおもわねがいゝ。おれなればこそしんばうして。五六たびもきてやつた。もふいろ男のよびはじめのよびおさめとおもや。跡で泣てもわめいても。とりあげはねへせ。須磨ほんに主のよふな客人が來さつしやらねへと。力がおちて。あしたから役所

へも出られず。ほんにかなしい事だぞ。
泣てへけれど。なせか涙がでへせん。
泣れるか。小便にでもいつて泣てみよ
ふ。と

平氣に出行ば。残念にもまたせんか
たなく。意趣をせんとはおもへども。
毎夜素見のじやまなれば。今はむな
しくとろ／＼と寐入しが。ふつと目
覺。白壁土藏へ月のあたるを夜の明
たとおもひ。さもいかつげに若い者
をおこし。戸をあけさせ表へいづ
と。犬わん／＼。

○冬の床

世界は大見勢。客は三十二。甚ぶ男。
脊中に縁のある顔なれども。万事いき
して如才なき通人なり。逢方は中三。と
しは十七八。きりう風俗。小町もそつち
のけにて。一体發明にて。張強。情深き
なれども。まだとしわかのおぼこ氣にて。

此客を嫌ふ事いわんかたなし。折節隣座
敷にて藤吉がめりやす。

雪の夜中のつめたくて。しよては隔
て。いつとなく。枕と枕顔と顔。いじ
のわるさの透間から。あれ邪間をする
夜寒の風と。ゑりと／＼をかけ合おふ
て。勤も戀もうちこして。實こもりし
冬の床。チャンヤンヤ。一重氣散じなも
ののだ。コウければや。まだだれか筆を
もつていつたこつたぞ。おふかたまた
外山さんだらふ。はやくとつてきや。

夜寒あのね。外山さんがおすせいです。ご
めんなんし。つい急にいいいしたによ
つて。おかりもふしいした。おかりが
たふおすとさ。一重きついふしやれよ
ふだね。といふながら。あんなせ此灯はこ
んなだのふ。すいり引よせ。客文里どふぞ
したか。一重どふもしせん。客文里
それでも。おかしな顔つきたせ。一重

生れつきでおすものを。文里そのよふ
にいわづとものどたらふ。マあいそづ
かしをやめて。一ツ吞はどふだ。氣が
はれよふせ。一重わたくしはなせか。
人にものをいわれると。腹がたつてな
りいせん。ごせうだからちつとものを
いわづに居ておくんなし。文里こり
やアきついぞ。成程十七八の時分はお
かしくもねへ事に笑つたり。なんでも
ねへ事にはらをたつものよ。まあ／＼
どふとも氣儘がいう。しかし風をひか
ふせ。羽織でも着ていれはい。

いたいけにいわるゝ程。猶はらたて
どもあたろふしまあらざれば。我
と我手に書く奴の。かきそこのふは
筆のとが。とがなき紙を引裂て。硯
にあたり立いづる。折からこれもよ
び出し中三。一重が姉女郎九重は。
障子をあけて見て。おやといつたば
かりにて。跡を振かへり。廊下をと

ふる胡蝶こてふをよび。

〔九重〕こんな／＼。よしのさんに。文里さんがおいでなんしたから。お知らせ申しすといつてくりや。〔文里〕おいらん。さあ／＼待かねていた。きついそがしい事だの。〔九重〕なアにマアなせ此頃はおいでなんせんへ。晝もよしのさんやたれかと。噂うわさをしていゝした。おめへさんこそいそがしいこつたね。

〔文里〕ソウサおれもいつそなつかしかつたけれども。浮世うきよのよふにせめられ。こになりそふだわな。

折しも。胡蝶こてふのしらせに。ほどなくこれも心こころやすき中三。

〔吉野〕マア文里さん。よふおいでなんした。なせ久しくおいでなんせん。みんなと待ちかねて噂うわさばかりしておりました。ほんにわつちとした事が。いふ事ばかりいつて。九重さん。よく知らせておくんなした。マアひとえさんを

きいておくんなし。幾度いくども逢あながらしらねへ顔かほをしておいりいすわな。

〔九重〕わつちにさへだんまりさ。〔文里〕ほんにうそにもその様にいつてくれるから嬉しい。ほんに友だちとよると。おめへがたの噂うわさばかりしているよ。〔よしの〕わるくかへ。ごせうざんす。〔文里〕おめへがたを悪わるくいふと。罰ばちがあたるわな。

〔よしの〕堪忍かんにんなんし。また文里さんのせじがはじまつた。サア久しぶりであげいせう。〔文里〕まづおせへにせう。〔よしの〕そんなら。九重さん。おあいをお頼たのもふし。〔九重〕ひとつたべいせうね。こんな櫻野うづつうつかりなもんだの。此處こゝさかづはを見ている。き出すき出すな。

〔文里〕おめへがた。どふゆふ縁えんか。こふ心こころやすく。みへもすてゝはなしてくれるから。なんぞおめへがたの好きそふなものをと考かんがへていゝつけてきたが。アノ忠七ちゅうしちはもふ持つてきそふなもの

だ。〔九重〕そりやア樂たのしみでざんすね。間もなく茶屋ちや男忠七おとしちはいろ／＼もちきたり。座敷ざしきせましとならべる。〔忠七〕あふきにおまにかねでござりませう。あいにく客人きやくじんがおちあいまして。勝手かたてがとりこみ。おふきに氣きをもみました。〔文里〕よし／＼。まあ一ツのまねへか。〔忠七〕まづあとの物ものをもつて參まゐつて。ゆるりつと戴おほきませう。と出で行い。〔九重〕よしのさん。今いまのおあいをあげいせう。〔よしの〕文里さん。あげもふしいすに。とろけ

〔文里〕肴さかながきたからまづおゝせへだ。〔吉野〕わつちやアいや。いゝむしだつたね。〔文里〕のめるくらいならあこぎはしねへが。こんやは酒さけの匂におひをかぐもいやだからさ。〔吉野〕そんならまあもふ一ツうけいせうか。何なんぞさんすね。〔文里〕ふさぐからさ。さア／＼おれに構かまわづとたべてくん。〔よしの〕そりや惡わるうざんすね。あのひとへさんはどふしなんしたね。〔文里〕いま來こよふわな。〔九重〕それで

もかんじんの。と立そふ。文里 そふいつ

て逃ふよとおもつて。九重 きついわる

氣だね。今夜はよしのさんも。わたく

しもてうどい、からおひ出されるまで

おりいす氣さ。文里 さあそりやうれし

いが。一ツかゞみに二ツ顔じやアねへ

かへ。九重 うそはきらいさ。文里 そんな

ならたべてくれねへけりやア氣がすま

ねへ。九重 文里さんも少し。文里 わつち

にかまわつ。九重 なせだのふ。

扱此二階中甚よくおもわれて。皆心

やすければ。くるあればかへるあり。

障子越に言葉をかけるあれば。とつ

ちりと咄す有。まどにみへもなく。

かざりもなく。傾城もがくやは只の

女にて。爰にいろ／＼あれども。と

繁くまたあからさまにはあらわしが

たく。ごぞんじのお方はたいがひに

ごさつしと略す。跡に四五人残て。

初瀬路 文里さんはなせたべなせんへ。

文里 なんにもいやさ。あすかのほんにい

つものよふに元氣もござんせん。どふ

か顔のいろも悪いよふでござんす。

よしのむりに一ツのみなんしな。文里ど

ふぞあやまつた。九重 まあアノひとえ

さんは何をしているこつたね。文里 ヘテ

まつうちが花。またるゝがつほみ。ひ

らケぬうちの樂しみさ。九重 それでも

あんまり。とたつを。文里 おめへがたが

かけると花が散わな。まあ下にいな。

あの子の來ねへうち。おめへがたに話

しておきてへ事がある。かならず笑つ

てくれちやアうらみだせ。一重 なんの

事だか。氣にかゝりいすわな。初瀬路何

んだんす。早くおきかせなんし。文里

イ、チャおめへがたも知つてるとふり。

一、え、さんもよく／＼嫌なればこそ。

こふ久しく來るうちにも。ついぞわら

つた顔をみせた事もねへに。かわいそ

うにコッペン／＼と來るも。あんまり

知恵がねへとおもふから。もふ來めへ

／＼といく度かおもふけれども。此様

におめへがたが心やすくしてくれるが

うれしさ。またはあの子もまだ年がい

かねへからきすいだろふとおもへば。

わるくされる事はなんともおもわす。

おめへがたのめへだ。人のかみにた

つものは人にゆびをさゝれねへよふに

しねへきやアならぬが。一、え、さんの

よふによくがなぐつては。次第に身づ

まりになるだろふと。行末が思ひすご

しがしられて案じられるから。こん夜

ははなそふか。あすははなそふかと

もふが。此よふな事をいつたら。また

氣にさわろふとおもつていゝかねてい

たよ。あの子はあのよふに思ふが。お

らア。と跡を。まあそれはともあれ。

こふ久しく來るといふも縁だろふとお

もつて。異見をいつたら。もふこめへ

とおもふが。どふでおれがいつちやア

あの子のためにもなるめへから。九重さんは格別の事だが。おめへがたともよく苦界のいりわけをいつて。氣のなるよふに異見をしてやつてくんなせへ。頼せ。これでもふ思ひのこす事はねへが。こんやが此二階の暇乞だとおもへば。ばかなあじな氣になつた。とはほろりと涙こぼす。一座こふ久しくころやすくしたものだから。來ねへといつても。もしつきやいで來たくらいなら。階子迄來るから。いま迄のよふに心やすく逢つてくんなよ。と

いへど返答あらざれども。なかに九重座しきいで。せつ成る心をかんにいり。思ひあまつて泣きながら。ひとえをともない。我部屋にて。

〔九重〕おめへはあきけれへるよ。〔一ト〕えヲヤなんでおすへ。〔九重〕なせ。文里さんはいやだか。とちうみらい泣して。〔御室路〕いまたつてきいておりいしたが。文里さ

んの心根がかわいそふで泣てばかりおりいした。〔九重〕おむろ路さん。いつてつかわそうとおもひすが。胸がいつばいになつて申されいせん。いつて聞かせておくんなし。〔おむろ〕アイ。とすゝ泣じよう中もふしいすが。よくものがわかりながら。おきゝなんせん。もつとも久しくおいでもなんすけれども。二階中で一座をせぬものまでがころやすく。だれでもわるくおもふものは壹人もおすせん。文里さんがちつと足がとおひと。おめへさんはなんとおもひなんせんが。みんなが待ちどふがつて。噂ばかりいつていゝす。それよりまあ茶屋のまへもおつす。もつとも文里さんの事だから人にしらせもなんすまいが。それだけ氣の毒でありそふなものでおす。〔九重〕まあ文里さんをよぶきはござんせんかへ。それじやアすみいすめへによ。そしてまあ不人

情といふものでだんす。〔一ト〕えうつむさらもつとも胸にもおほへがありいせうが。あのよふに深切にしなんすほど。意地にかゝつてわるくしなんすが。ついぞ腹をたちなんした事もなく。今も今とていとまごひをしなんして。おれが來ぬあてもおめへがあんまり氣すいだから。行末があんじると。みんな頼みなんした。わるくされる事はない。なんともおもわづ。こんな深切な客人があろふとおもひなんすか。女郎めうりがつきいすにへ。ほんにちつと公界と儀理をお知りなんし。こふ申しすもおもひゝすからでだんす。〔一ト〕そのよふにおめへさんがたが。わたくしを思つていつておくんなすとおもへば。いつそうれしうおす。ほんに文里さんは久しくおいでなんす内も。いやらしい事もなく。勤めにくゝもおすせんし。物前の苦勞をせぬも何やかやぬ

しのせ話ゆへだとおもひすが。なせかそのよふに深切にされるほど。猶いやでなりいせんから。つい悪くしいすけれど。いつでも機嫌よくおかへりなんすゆへ。跡では氣の毒になりいして。こんどきなんした時はよくしいせうとおもつても。顔を見いすと腹がたつてなりいせん。大方敵どふしとやらでおすせう。堪忍しておくんなんし。九重あきれけるよ。そんならどふともなんし。と

いゝければ。たつもたゝれすうちくくと。座敷へ行との言葉をしほに。きのどくそふに立ちいで。何心なくうかどへば。文里をはじめ一座の傍輩。座敷は泪の露時雨。一トこといふてはむせかへり。顔見合ては泣しづみ。名残を惜むそのふせい。しはしためろふそのうちに。つく／＼とおもへば。ほんに今更に。仮初な

らぬ三年の恩。またも掛がへあるよふに。なせあのよふにした事かと。まさか名残のおしまれて。しきりに哀と胸せまり。またそのうへに此身のうへ。これまであたのにくしみなく。行末までをあんじると。のこるかたなくなさげぞと。心で繰だす我身のあやまり。わかれとそぞろに氣も乱れ。うつてかわりしひとえが心底。わつとばかりに泣ふせば。たゞさへ哀な此座の模様。またも一座はもらい泣。前後もわかず臥しづむ。文里はよふ／＼氣をとりなおし。

側におりおふ茶碗にて。手酌のむり酒二ツ三ツ。みんなへもと。跡は涙の暇ごひ。行んとするをトへは。あるにあらぬ思ひ。裾にとりつき泣ふせば。文里は振切り下につくばい。文里みやげ心のあいそうは嬉しいが。これよくきくな。外の者にはそふでもあるめへが。たとへおれがよふにしんにいやとおもふ客人がきても。おめへのよふにしては身のためにならぬから。ちつと欲をしんなせへ。若さはわかし。むりもねへが。はてすいた男はまれにして。いやな男の多ければ社苦界といふもの。そこを随分しんぼうして。かげながらいゝ耳をきつて。またこんなのろひ句をいつて。氣にあたらばかんにんしな。と

たちあがれば。トえは何とせんかたも。どふぞしておくんなんし。とはんぶん跡はむせかへり。涙をおさ

へて。初瀬路は

〔初瀬路〕これ文里さん。今夜ばかりはどふぞいて。あの子の胸もきいておくんなんし。〔文里〕ハテとめてくれば恨だ。はじをいふのも心やすいとおもふから。〔初瀬路〕サアすいぶん無理とおもひせんか。一へえさんもおのよふにくすから。〔文里〕ありやア三年もこふ來たものだから。まさかにあいそうぶりだわな。〔よし〕なんでもわたくしどもが一生のたのみでさんす。〔文里〕おめへがたがそのよふにいつてくれるを。やばに歸られもしめいか。〔よし〕なんにも申しせん。嬉しうさんす。〔あすかの〕九重さんは泣ておいでなんすから。此由をしらせて喜ばせもふしうせうと。

よふく一座も氣をとりなoshi。座敷おさめて床へ入。いとまごひやら。禮いふやら。我部やぐへ立かへる。一へえは涙よふくと。おかたじけ

のふござんすといふたまうにも捨がたく。世話に成し禮いわんと。なくく座敷を立出る。文里はうわ着ぬぎ捨て。帶くるくと引しめて。たばこくゆらし居る所へ。間もなくばた／＼一へえが足音。こなたはうしろへむきかへて寐たる様子にもてなせば。一へえは眼ぶち泣はらし。泪をふくしみます紙を。手にもじ／＼とひねつても。何かしきいのたかければ。氣の毒そうに床に入。少しは心おちつけど。まだ氣にかゝるは文里が胸。何からいふてあやまらん。とのぞいて見たり考へたり。惚た初會の如くにて。いわんとすれどいゝかねて。おもひ／＼て時うつり。拍子木の數かぞうれば。もはや七ツのあけちかければ。おもひきつて。もしへ／＼といへど。いつかふいらへなく。今宵いわねばわかれての跡でいふて

はかへらぬ事と。おひまわせば氣もせかれ。なんとせんとは思ひしが。おもひあまりて堪忍してと。わつとさけば。文里は目覺しよふすにて。〔文里〕なんだびつくりした。と振向たばこそどふした。また癪がおこつたのか。〔一へえ段／＼〕のお腹立ちむりとはさらく思ひせん。どふぞかんにんして。とうつ〔文里〕これはあらたまつた。はらをたつぐらいなら。今迄人の口齒にかゝつて來わしねへが。そのよふに嫌がるものを。べん／＼ときたはおれが罪だつけよ。〔一へえ〕そのよふにおつせいす程。なせあのよふな氣であつたとおもへば。いつそ死にとふおつす。今迄が今迄だから。どふで承知はしなんすめへ。と。兼而よふいの髮剃にて。手はやく袂を口に入。枕へあてゝ小指をおしきり。紙に包てなげいだし。

「トエ」これまでの事はかんにんして。うたぐり晴しておくんなんし。と

もれくる血しはを紙にてふせぎ。みれんをみせじと齒をくいしめ。こらへて見てもふるへしは。眞實見へていじらしき。文里はとつてなげ出しお面をかへて。

「文里」いらねへわへ。こんな物をゑばにしてかゝれるよふな咎はしねへは。これ今迄は年がゆかぬゆへ。あどけねへ。欲のねへ子だとおもふから。悪くされるもいとわづきたが。うつてかわつてこふづとい仕打をされては。もふ疳癪にさわる。これまづ惣たい苦界といふものは錦の夜着にからまるも。こも一枚のよたかでも。めん／＼のすきでつとめするの一人もねへ。親はらからのために身をしづめ。それをおもへば不便さに氣隨氣儘も里のならいと。とふしてやるぞよ。つらからば只

一筋につらからで心におもわぬそらなみだ。今になつてなんのたわ事。いたへ事はかず／＼あれど。われとわがでに耻をいふのがはづかしさにこらへているぞ。とこへぞ賣つて金にしろ。といふはなせば。トエはしじうしやくりあげ／＼。

「トエ」成程腹もちいせう。それもわたくしが心からだと身をうらんでおりいすが。せめてト言堪忍したといふなすをきいたうへでは。命はさら／＼おしうおすせん。と

いふたい事もせきくる涙にへだてられ。心はとこへ飛ゆきしか。もはや別れと思ひつめ。トエとどふでもぬしは。といへど。見むかず小声にて。文里へかいておくるはぬの嘘。誠すくなき命げも。鹿毛もなく音やしとふらん。

トエは。今はこれまでと以前の

みそりと出し。すでにあやうく見へたるに。文里はあわてゝとむれども。はなしてころして／＼と。しばしあらそふそのうちに。髪剃とりあげ口へ手をあて。文里やれはやるな。何ゆへ死ぬ。といふこへ聞てうらめしげに。顔うちまもり。トエ何ゆへとはきこへいせん。どふでうたぐりはれはせず。未來で言訳しいすから。かまわすはなしてころして。と髪も乱れ。氣も乱し。文里はまたもゆだんなく。

「文里」これさ／＼うたぐりはれた。これさ。もふいゝはな／＼。まあ／＼顔でもふきやよさ。トエそんな堪忍しなすかへ。文里ムウかんにんするよさ。

爰にはつとためいきあると。中庭の連理木にて。よろこび鳥

カア／＼。

自跋

二筋道と

は。世に行

るもの。大

道の善にあ

らで。右も

左も銀世

界。うかれ

鳥のまよひ

来る。はか

なき雪の粧

ひに。はた

して水堀へ

はまりやす

きは。是人

自跋

二筋道と。世に。行くもの。大なる

善。うかれ。鳥のまよひ。来る。はか

なき雪の粧。ひに。はたして水堀へ

はまりやすきは。是人

は。是人

心ぞかし。
 されば吉原
 へは入ぬこ
 そ。實の通
 意と高雄が
 金言雨降ず
 して地固ふ
 するは。此
 書に足る事
 を知らば。
 何ぞ心の雪
 解に。泥す
 愁ひなから
 ん。

大尾

ふれ吉原へ入ぬ。そ。實の
 通意と高雄の金言雨降ず
 して地固ふするは。此書に足る
 事を知らば。何ぞ心の雪解に。泥
 愁ひなからん

大尾